

空

平成30年2月28日発行

第16卷1号

通巻第77号

空



2018・2・3

SORA 77号

熊本 松田明子

水入りもあるにはありて宮相撲

宮相撲氏子の座る砂被り

水音を近くに置きて紙を漉く

学僧は廊下に控へ報恩講

十基ほど殉死の墓や石露の花

宮崎 田代民子

鳶の輪の高き旋回神送

黄落や天馬にとほき岬馬

伏せられしままの一舟神の留守

荒磯廻り拾ひて固き新松子

橋脚に張りつきし貝冬隣

北九州 兒玉充代

沖に沖ある短日の漁船

馬の四肢伸びやかにして冬青空

柵の馬四方の冬山しか知らず

しはぶきをこぼしつ人の遠ざかる

日の差して紅葉のさらにもみぢ色

長崎 仲里奈央

天高し仲直りして大好きに

台風の後の雲間のひかりかな

5歳児に宿敵現る運動会

裏漉しの終はりの見えず日短か

泣く場所の一つは欲しや冬の鵲

福岡 田代 貞香

望郷や声高くなる虫の闇

本堂に巨大念珠や秋気澄む

鈴生りの柿を見上げて一人暮し

一鞭で秋風となり馬駈くる

神の留守喉まで見せて池の鯉

北九州 横田 敬子

丹田に力を入れて南瓜切る

梨食べて少し体の重くなる

釣れる人釣れない人も鯊日和

鳶のよく舞ふ空青し大根蒔く

紺深き海は恐ろし鷹渡る

福岡 永淵 恵子

青空の上も青空鷹渡る

かく近く白き腹見せ鷹柱

島あげて大声援の運動会

一升瓶両手に提げて鎌祝

会ひたしと小さく書き足す十三夜

須恵 苑 実 耶

連山の襷きはやかに鳥渡る

銀杏のコーナー銀杏の匂ひ

畑よりそのまま貰ふ大根かな

冬瓜や母に厨の高くなる

十六や人恋しくて手紙など

北海道

押田裕見子

手返しの母の袷のやはらかし

色のなき風にかたまくと和紙の花

語ることなくて熟柿をすすり合ふ

石灰化してゐる動脈そぞろ寒

冠雪の山は我がもの遠眼鏡

太宰府

西住三恵子

一望といふには広し阿蘇の冬

青空を一枚にして稲架を解く

霜除の男結びや無人駅

日輪の淡し冬蠅歩くのみ

六地藏裏も表もなき冬日

東京

山田正子

小春日の聖母マリアの素足かな

老いながら母は童女に冬すみれ

ふるさとの川の名に酔ふ新酒かな

秋冷の漆の樹皮に傷あまた

かりそめの薄日をまとふ冬桜

直方

石橋幾代

十三夜大きくなりし夫の影

のたうちて伏したる稲を刈りにけり

花芒地獄落としの罫かけて

灘風や曲がり曲がる唐辛子

時雨るるや火止めの窯のなほ赤し

北九州 河原敬子

くれなゐは太き茎まで葉鶏頭
蠨螂のゆらゆら歩き跳びてみよ
蠨螂の怒りや反りて羽根広げ
家族ごとけやき黄葉の蔭に座す
藁塚の寄り合ふごとく置かれたる

春日 三井所美智子

名月や筑紫平野を眠らせて
よく見えて零余子届かぬ位置にあり
登高の丘は前方後円墳
餡を練る時の無心や柿日和
おくんちの地べたが座席お諏訪さん

兵庫 大西乃子

山間にソーラーパネル神の留守
大いなる露と思へり天守閣
冬の蝶翅の重さを耐へてをり
風孕み重くなりたる吊し柿
干大根咎あるやうにぶらさがる

兵庫 えとう樹里

つやのよき焼豚吊らる秋の雨
羊みな名前を貰ひ冬うらら
青深めゆく海見ゆる大根干す
大根干し終へて夕日のなかに立つ
母の背の匂ひのやうな花野かな

東京 遠山のり子

手の平にその大きさを朴落葉

返り花十字路脇の駐在所

乾く音枯葉の足に絡みくる

枯葉舞ふ隣の犬がまた吠ゆる

菊日和卒寿と言ひて微笑まる

兵庫 林 徹也

切支丹の墓の字なぞる草紅葉

ザビエルの杖高々と石榴爆ず

看護師の靴音遠くなる夜長

虫喰ひの黄葉を挿む黙示録

秋寒や橋に高鳴る宿の下駄

東京 今井 康子

傷つきしかりんも並べ里の市

蓋のなき鍋並びをり冬青空

実むらさき遥か昔の石切り場

大津・石山寺

酒蔵の空瓶脇を抜け小春

柚子光る水尾の里に仏蘭西語

神奈川 窪みち子

横浜野毛山動物園

野毛坂の気まぐれ雲も秋の色

抱き上げし兎に秋の日の匂ひ

目つむりて秋の声聞く檻の獅子

秋さびし園のキリンの長睫毛

絵タイトルの船秋光をはじきけり

・第七回「空賞」受賞作品・

豊の秋 河原敬子



「空賞」をいただき
有り難うございます。

俳句は難しいですが、
どんなことにも興味
や関心が湧き、知らな
いことの多さを嘆きつつも、ひとつずつ学
んでゆく生活はとても気に入っています。
長く続けたいです。

先生や句友にも恵まれ、感謝しておりま
す。これからも少しでも良い俳句が詠めま
すよう、励む所存です。今後ともよろしく
お願い致します。

いつさいを浄めて走る大山火

人好きで付き合ひ下手で金盞花

通学路の川辺のふたり卒業期

卒業の朝の黒板詩の一篇

小鳥二羽弾みて桃の花雫

春光に透けて羽毛の吹かれをり

春風や柵に預くる馬の首

酒樽積み新樹の山がご神体

堰いくつ越えしか鮎の川激つ

早苗踏まぬやう白鷺の高歩き

漬物屋の看板に錆青田風

なびきては発掘を待つ夏野かな

大滝のしぶきの及ぶ馬洗ふ

教会へ道の明るき袋掛け

殉教の寢墓がひとつ朴の花

炎昼の六道の辻胸騒ぎ

日盛りや老いて約束控へ目に

地獄絵の八方火の手鳥渡る

行者滝の岩剥き出しやななかまど

樵の枝の瘤は水瓶小鳥来る

りんだうや池塘の形は風まかせ

色づきし郁子に試しの爪のあと

鐘の音に醸されてゆくましら酒

故郷の砂さらさらと諸届く

石榴割れ種ひとつづつ光もつ

仏間より熟柿となりて戻りけり

豊の秋こんなにもある用水路

広縁に並ぶ座布団冬日燦

国東の鬼に会はむと雪女郎

磨り減りし船頭の座や冬木の芽

空集抄
柴田佐知子抽出

山々に朝の力や鷹渡る

深川淑枝

生活を七日で区切り秋高し

高倉和子

片づくるものは片づけ火の恋し

戸栗末廣

冬ざれや込み合つてゐる獣道

宮井知英

毛糸編む愛の形を遺すべく

中田みなみ

紅葉もて封じ込めたる観世音

岸洋子

栗を剥く嫌々ながら全部剥く

曾根富久恵

魔がさして雀大きな蛤に

永淵恵子

泣いてゐるらしき背中や夕焚火

天谷翔子

息吸へば身の浮き上がる柚湯かな

織田高暢

母馬仔馬一巡させて馬の市

千波悠



漂着のやうに遠泳終はりけり

黄葉して銀杏大きくなりにけり

不知火を見たといふ眼の泳ぎゐる

神域は落葉の走る音ばかり

黄昏の時に鶴のをさまれり

ひとりだけの家具工房や刈田晴

鶏頭の枯れゆく赤さ衰へず

疝の虫どうにもならず毛布被る

焦るとも一と日はひと日小六月

旧式に暮らすも贅やちんちんこ

坑道の闇は閉ざされきりぎりす

マフラーを巻いてやりたき頸細し

声にして草木ねぎらふ野分あと

角野良生

大西乃子

山本則男

苑実耶

松田明子

河原敬子

石橋幾代

吉田悦子

田岡千章

原友子

田代貞香

山内碧

青木朋子

熱爛の喉過ぐるとき赦したり

雁渡し蟹より酒を振る舞はる

小春日の城下に競ふ四半的

いつしかに鳴き替りをり虫の闇

亡き友の母に書く文十三夜

許すとは力ぬくこと雪ぼたる

さはやかや木登りの子の尻を押し

何か足らぬ秋の七草挿してあり

山眠る手のひらほどの鳥の墓

みづからの大きな洞へ一葉落つ

隔てなく育て貰ひ手なき仔猫

渡り来てすぐ水鳥となりにけり

凍てつきし砂利の音する神社かな

古賀 真理

井上 和子

小島 翠波

森田 明成

横田 敬子

えとう 樹里

林 徹也

三井所美智子

田中とし江

田口萬智子

小林 朱夏

あさなが捷

秋 千晴



まだ名前なき子の匂ひ秋うらら

鱗雲より現るる航空ショー

流木の突き刺さる地や曼殊沙華

コーラスの息つぎ揃ふ聖夜かな

鶏鳴くや子を頼らぬと言ひきれず

浮雲や工事現場の音も春

地にきざむ河波の跡台風過

水の湧く処は昏し秋薊

厚着してしばし待たする聴診器

山月記読むにとどろく雪起し

手を引かるる子が山車を曳く秋祭

法事すみ又一人なり秋の雨

神の留守鳥居浮かびて暮れゆけり

今井康子

村上二三

後藤園子

兒玉充代

田代民子

宮川正彦

本多トミ

宮崎とみよ

むつみ蓮

押田裕見子

岩下きぬ代

三輪敏夫

空作品評

柴田佐知子

山々に朝の力や鷹渡る

深川 淑枝

闇が退き光の世界へと変わり、すべての色や形が生まれ変わったように朝日を浴びて立ち上がってくる。山々もくつきりと峰を連ねているであろう。へ山々に朝の力や〜という大胆な表現が瑞々しい。それを受ける下五の季語はへ鷹渡る。天地に勇壯の気が漲る堂々たる作品である。

生活を七日で区切り秋高し

高倉 和子

へ七日で区切りは、会社勤めを経験した者は大いに共感する。休日で一息つき、さあまた今日から一週間頑張るぞと繰り返す生活。大変だが、へ秋高しはが明るい。

栗を剥く嫌々ながら全部剥く

曾根富久恵

栗が出回ると栗飯を炊きたくなる。買った以上は剥くしかない。硬い鬼皮を剥いても終わりでない。渋

皮を剥くのも大変だ。指が痛みうんざりしてくる。以上の様子がへ嫌々ながら全部剥く〜という無理のない素直な言葉で見事に詠みこまれており、且つユーモラスな味わいがある。

毛糸編む愛の形を遺すべく

中田みなみ

愛する人のために毛糸を編んでいるという内容はあまた詠まれているが、類句類想を厭われるみなみさんの手にかかることのような作品になるのだ。へ愛の形を遺すべく〜という思いがけない措辞が瑞々しい。時間と共にその愛の形は変わっていくのだろう。そのような思いを抱かせるのは、へ遺すべく〜という言葉によるものだろう。

泣いてゐるらしき背中や夕焚火

天谷 翔子

誰にでも人に知られないように流した涙があるだろう。夕焚火と独りっきりの後姿の静けさが切ない。眼前の景が、生きていくことの寂しさのように思えてくる。作者の繊細な感性がとらえた作品。

へ以下略

空集

柴田佐知子選

風待ちの鷹漂へり朝の嶺

北九州 深川 淑枝

山々に朝の力や鷹渡る

おのづから遠目効きだす鷹の空

息熱く馬の立ちゐる枯野かな

踏み跡のまた踏まれ馬場冷まじき

扉を洩るる月光馬の立ち眠る

小春日や的場の砂に海匂ひ

生活を七日で区切り秋高し

福岡 高倉 和子

外出の札を戻して夜業かな

一陣の風に色変へ秋の潮

石垣を少し濡らして穴惑ひ

みづうみの端は澄みゐて冬はじめ

焚火より戻りて父の匂ひとも

盛り塩の黒ずんでゐる十二月

初風やどれも疵負ふ舫ひ舟

広島 戸栗 末廣

水の秋眺めてとほきものばかり

うすうすと饅糸ゆく快樂榎櫃の美

色鳥や農事日誌に箋あまた

暗がりには神の領域石路の花

乾きたる音にはじまる冬の雨

片づくるものは片づけ火の恋し

転がりて南京豆の乾く音

糸田 宮井 知英

着ぶくれて夫の小言も上の空

小春日や神の気紛れかも知れず

生家また終の住処よ実南天

這ひ這ひの子羊もゐて聖夜劇

冬ざれや込み合つてゐる獣道